

的に、愛知県がんセンターの不破らの方法を追試する形で ¹⁹²Iridium thin wire を用いた腔内照射を91年9月より試み始めた。胸部X線写真無所見で気管支鏡上所見があり、扁平上皮癌の確診がえられ、低肺機能、重篤疾患の合併などで手術の適応外とされた症例を第一の適応と考え、外照射 40 Gy/20 f および腔内照射 5 Gy/f×5 f を基準線量として照射を試行中である。現在までに10例の登録があり、7例が照射終了、2例が腔内照射施行中1例が外照射を開始したところである。

3) 多分割照射法の初期経験

伊藤 猛・吉村 宣彦
土田恵美子・稲越 英機
酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)
川崎 俊彦 (長岡赤十字病院放射線科)
塩谷 淳 (県立中央病院放射線科)

新潟大学医学部附属病院、およびその関連病院で多分割照射法で治療した45症例47部位について検討した。2例で喉頭癌と食道癌の重複があり、いずれも多分割照射を施行した。部位別では頭頸部が33例と最も多く、STAGE 別ではⅢ期Ⅳ期の進行例の比率が高かった。短期の観察であり一次効果を中心に検討したが、評価可能な例で検討すると、局所制御率ではCRが55%、PRが45%で、NC、PD例はなかった。また頭頸部扁平上皮癌の初回治療根治照射群24例で、原発巣とリンパ節について別個に検討したが、原発巣ではCR 63%、PR 37%、リンパ節ではCR 42%、PR 58%であった。粘膜反応など、急性の放射線障害は通常分割例に比しやや強い印象であったが、副作用のため途中で治療を断念した例はなかった。多くの症例の蓄積と、長期制御率の検討が今後の課題である。

4) 10年以上生存、100歳になった食道癌放射線単独治療の1例

小林 晋一・新妻 伸二
清水 克英・斎藤 真理 (がんセンター新潟病院放射線科)
樋口 健史

食道癌は予後不良の癌に属する。89歳時、放射線単独治療を行ない、10年以上生存、100歳になった食道癌症例を経験したので報告する。症例は、89歳、女性。部位はIu~Im、長軸径6cm、

病型はロート型である。ロート型であるが腫瘍成分が多かった。組織型は未分化癌。主訴は嚥下困難。

食道 X-p, 食道ファイバー、生検で診断された。

放射線治療は 6 meV X-ray, 正・両斜30° の3門、照射野 6×10 cm, 3×18=54 Gy (25日)。高齢のため入院期間をなるべく短くするためこのような線量配分とした。その後再発なく生存。1991年11月で10年10ヶ月なる。

5) Brain Stem Glioma の画像所見

—MRI を中心に—

横山 貴子・桑原 悟郎 (新潟大学放射線科)
西原真美子 (新潟大学歯科)
岡本浩一郎・登木口 進 (新潟大学歯科放射線科)
伊藤 寿介

brain stem glioma 4例の MRI 所見を中心に呈示した。症例は4~8才の男児であり、片側の外転神経麻痺、歩行障害で発症した。全例で MRI 上、橋を中心に mass effect を有する病変を認め、中脳から延髄に及んでいた。進展範囲の把握には特に矢状断像が有用であった。4例共、病変部は T1 強調像で低信号、T2 強調像で高信号を示していた。治療開始後の follow up MRI で4例中3例はほぼ等信号域を呈するようになった。1例では初回検査時に、3例では治療開始後に、enhanced portion を認めた。

MRI は CT に比し、病変の存在と進展範囲を明確に把握でき、治療後の経過観察にもより有用であると考えられた。

6) 真菌性上顎洞炎の画像所見

中山 均・益子 典子
萩原 和夫・足利谷美砂
佐藤 正治・林 孝文 (新潟大学歯科放射線科)
佐々木富貴子・中村太保
伊藤 寿介

真菌性上顎洞(副鼻腔)炎は、免疫能低下などの患者に発症すると考えられてきたが、近年になって特に基礎疾患を有しない患者にも多く発症する。しかし単純写真では決定的な所見がなく、しばしば通常の上顎洞炎と考えられ、治療が奏功しない場合も稀ではない。

我々は、88年から91年までで、検鏡所見で aspergillus による感染と診断された上顎洞炎を5例経験した。この画像所見を、文献的考察を加えて報告する。

症例は29才から64才までで、男性1例で女性4例であった。5例とも片側性の上顎洞に炎症性病変を認め、CT